

公共哲学と公務員倫理

～ 金泰昌氏からのご意見～

総務委員会調査室 あらい たつお
荒井 達夫

本年1月22日、参議院内閣委員会調査室、総務委員会調査室及び行政監視委員会調査室の3調査室共催による「公共哲学と公務員倫理に関するパネルディスカッション」が行われました。テーマは、「公共哲学と公務員倫理 - 民主制国家における公務員の本質」であり、パネリストは、金泰昌氏(公共哲学共働研究所所長)、武田康弘氏(白樺教育館館長)、山脇直司氏(東京大学大学院教授)と荒井達夫(兼司会)の4名でした。これについては、本誌別冊(2008.2)で全貌が紹介されているほか、私も本誌第279号「公共哲学と公務員倫理～パネルディスカッションを振り返って～」で、その意義と感想を述べております。

この度、私の論文について、パネリストの1人である金泰昌氏からご意見をいただきましたので、本誌に掲載することにしました。

【荒井さんの論文を読んで】

公共哲学共働研究所長 金泰昌

『立法と調査』(NO.279)pp.54-57に掲載された荒井達夫(参議院総務委員会調査室)さんの論文には、わたくし自身に関する言及が多々ありますので、基本的な事柄についての若干の釈明が必要であると思います。

まず意味のある対話のためには自己と他者、自分と相手の位置付けと意味付けをきちんとすることが大事ではないかと思えます。そこでわたくし自身は基本的に「学問としての公共哲学」ではなく、実践活動としての「公共する哲学」の共働学習をすすめてきた立場から発言し続けているということを理解してほしいのです。公共哲学を公共する「場」を設け、「気」を盛り上げ、「理」をぶつけ合わせることを通して新しい地平を切り拓くというところにわたくしの第一次的関心があるのです。そしてそのような哲学対話を続けていますのは、日本と中国と韓国、そして、できれば世界が、国境・人種・文化・宗教・言語などの壁を超えて、互いの相和と和解と共福が実現可能な民間主導の生活世界のネットワークを創りたいからなのです。市民による・市民のための・市民とともにする哲学対話のグローナカルな共働時空です。グローナカルというのは、グローバルとナショナルとローカルという三つの次元や視点や立場が相互関連するということです。それが直接的もしくは間接的に「学問としての公共哲学」につながるところがないとは言えませんが、学問的

な業績を出しているのはわたくしではなく、他の大勢の専門学者たちです。このような実状をきちんと分かっていたきたいのです。

わたくしはどこまでも一民間人の楽学（学ぶことを楽しむ）者であり、韓国籍の大阪在住の市民哲学愛好者です。公共哲学専門家とは違う位相にいる民間哲学者と言いましても「日本国籍の民間人の民主主義哲学者」と言える方々もいるでしょうし、わたくしのような「日本在住外国籍民間人の公共哲学共働学習者」もいるわけです。そしてその間にはそれぞれの発想・観点・見解の違いがあり得ます。ではわたくしのような人間の意見がどのような意味と役割を持てるのか。それは、日本がもはや大和民族の単一民族共同体国家ではなく、多民族・多文化共生の公共空間としての国家に変わりつつあるから従来のような一国共同体的な発想・観点・見解の限界を超えるためです。

わたくしの考え方が日本の国家公務員としての荒井さんの見解と最初から完全に一致しないのがむしろ自然・当然・必然かも知れません。だからこそ共に・真摯に・誠実に語り合う意味・必要・価値があると思うのです。単一民族共同体としての日本国の公務員という意味付けは、あまり固定化されるべきでないというのがわたくしの公共哲学的発想だからです。わたくしの考える「公共する哲学」というのは数多い多様な公共哲学的発想・立場・観点・見解たちの中の一つにすぎないものです。わたくしの「公共する哲学」というのは、いろいろ批判されています。学問としての公共哲学はその体系がまだ十分には整理されていないし、まさに発展途上の段階にあると考えていただくのが正確であります。ですから荒井さんが公共哲学をわたくし個人の意見との関連だけで公務部分に導入するべきでないとは断定してしまうということは、わたくし個人にとっては今後の課題として継続的に対話を積み重ねていくとしても、他の数多い公共哲学者たちにとっては不公平であると思います。

わたくしが荒井さんの呼びかけに応じたのは、日本在住の外国籍の民間人でありながら「公共哲学対話学習者」という立場からの発言が求められたと思ったからです。今日の公務員制度についての若干の主要問題点を議題にして「学問としての公共哲学」の立場と「日本民間哲学者」の立場に加えて、わたくしのようなものの立場も入れて討論するというふうに理解したわけです。正直に言って、荒井さん（そして参議院総務委員会調査室側）の開かれた国際感覚の在り方に感動しながら同時に不安もありました。日本の公務員制度に対して外国籍、それも韓国籍の民間人を最も公的な組織の真ん中に呼び入れて、最も公的な制度に関する問題について率直な意見を交わさせるということは、日本の現状では考え難いことと思ったからです。少なくとも1990年来日以来のわたくしの実体験としては、二、三の特殊事例を除いては、このようなことは前例がなかったと思われます。同時に不安だったのは、外国籍の人間が何故日本の公的機関の中に入ってきて公的な問題についてあれこれしゃべるのかという疑念・反感・不快を感じる方々もあり得るということをも十分想定できたからです。当事者ではない部外者と決め付けて差別・除外・拒否するという心的姿勢がまだ根強くあるということを実感しているからです。普段は、特に自分の境遇と直接無関係な範囲内では、コスモポリタンとかグローバルとかいろいろもっともらしいことを声高くさげびながら、いざ少しでも自分自身に関わることになるとうるさく程、素早くナ

シヨナリスティックに変貌する人間たちを、長い外国生活を通して嫌になるくらい目撃してきたからです。うまく抑えられた外国人嫌い、人種差別的な潜在意識が瞬間的に表出するわけです。世界の状況がどんなにグローバル化し、またローカルな視点の大事さが重視されようとも、やはりナショナルな次元はいつでもどこでもつきまとうという現実を切実に実感しています。わたくしの考える「公共する哲学」をグローバルでもなく、グローバルでもなく、グローナカルなものの特徴付けるのは、今までいろんな国々で積んできた生活体験に基づいて、自己と他者と世界を吟味・深思・熟慮してきた結果に基づいているからです。

わたくしのような体験と目標と視座をもって哲学対話を多様・多元・多重に続けてきた者の考え方は公務員の通説的見解を正当化するためではなく、それをより広い世界で通用し、異質の他者たちにも納得されるものに改善していくために、もしかしたら参考になるかも知れないというささやかな期待を込めているだけです。わたくしの個人的な本心と言えば、日本の公務員が日本人だけではなく、国内外の外国人の方々にも尊敬されることを希求するということでもあります。